令和８年
9
No.120

寺子屋だより

富士越龍図

北斎広重　ふたりの富士、それぞれの富士
［すみだ北斎美術館　企画展］
※詳しい解説は12頁に掲載しています

※題字／森川芳聲

もくじ

2 巻頭言 愛国心教育……山口　秀範
3 母のこと伯母のこと⑦……髙見澤　玉江
4 偉人レポート……武田　真理子
6 「この一冊」―『後世への最大遺物』（内村鑑三著）…河野　悠介
7 この一首……山口　秀範／小林　国平
8 鄙爺日記 その⑧……猪部　敬彦
9 東京裁判下の竹山道雄④……廣木　寧
10 TERAKOYAふぉとれぽーと
11 〝あちこちde寺子屋〟のご案内
12 山とものがたり(8)　余録

巻頭言

愛国心教育

代表世話役 山口 秀範

教育基本法改正から二十年

七月二日ＮＨＫテレビ「おはよう日本」で志明館が取り上げられました。ひと月半ほど前に取材の打診が舞い込み、学内で協議した結果は「断ろう」でした。番組のテーマは「二十年前に改正された教育基本法が学校現場にどう定着しているか」のようでした。校長以下かつて地方局の取材を受けて苦い経験をしており、「発言を恣意的に編集し、こちらが意図しない方向へ曲げて放送される」危惧を拭えないとの意見が大勢を占めました。

一方平日朝七時台に全国放送で紹介されるのは広報的には願ってもないチャンス。インタビューを受ける校長に細心の準備をした上で臨もうと決断してもらったのです。

二十年前の法改正の眼目は①「ゆとり教育」で低下した学力・学習意欲の向上、②規範意識・道徳心低下への対応、③時代の変化に合わせて国際化や情報化などを追加、でした。とりわけ戦後長く避けて来た「愛国心の涵養」を義務教育に位置付けることが第一次安倍内閣の強い意志でした。そして実際の文言は「伝統と文化を尊重し・・我が国と郷土を愛する」となりました。

放送を視聴して

「愛国心」の表現を法案に入れるか否かを巡って、当時の連立与党――自民党と公明党――内で激論が交されていた記録が明らかになり、それが今回の特集番組の契機になったそうです。その内容も放送中に紹介されましたが、正に字句の問題のみであって、日本の子供たちに何がそれまで教えられず、それをどう改めるのかという本質的な議論は避けられたままでした。

二十年後の現在全国の小中学校で、自国の伝統・文化がどう教えられているか、そしてその帰結として祖国を愛する子供たちが健全に育っているのかは今後の検証を待たねばなりません。

志明館については数時間の取材の中から寺子屋ルーム（和室）での偉人伝授業と校長へのインタビューが紹介され、生徒たちの礼儀正しさや学習意欲が視聴者の目を惹いたようです。多くの支援者の方々からも概ね好意的な感想が寄せられました。

ＮＨＫのアナウンサーやレポーターは「愛国心」を度々口にし、苦心して法案にした「我が国と郷土を愛する」は一般に定着していないことを物語っています。言葉を定義しても実態は進まないという好例で、志明館の実践がわざわざ紹介されること自体、「戦後レジームからの脱却」を掲げた安倍首相の悲願は未だ公教育の常識になっていないということでしょう。

「平和教育」の実態

名称と実際が相応しない例は幾らもあります。「平和教育」なども平和の尊さに気づき、どうしたらそんな平和を維持し継続できるかという本来の視点を外れ、戦争の悲惨さのみを強調し、然もそんな事態に陥れたのは日本の軍部の無謀が原因だったとする授業が戦後営々と続けられ今日に至っています。これなど「平和」とは名ばかりで実は「自虐史観」の押しつけが未だに公教育を覆っていることに呆れるばかりです。ここでも「戦後レジームからの脱却」が容易ならざることを知らされます。

楠木正成を偉人伝で

昨今私たちの情報空間は急激にインターネット上のＳＮＳ（ソーシャルネットワークサービス）と生成ＡＩ（人工知能）に支配されつつあると実感します。根拠のないニュースがまことしやかに流されて多くの人々を混乱に陥れたり、架空の映像を組み合わせそれが実在したかのように独り歩きして歴史を改ざんしたりという、油断のならない世の中を私たちは生きて行かねばなりません。

そこで確かなのは、信じられる人が直接語ることば、信頼できる媒体を通して伝えられる活字でしょう。ささやかながら本誌「寺子屋だより」もその一端を担い続けたいと願うものです。

私にとって志明館の授業は、次代を担う子供たちに真実を伝え続ける貴重な場となっています。夏休み前の四年生向け偉人伝では熟慮の上楠木正成を取り上げました。戦前まで日本で最大の英雄であった正成は戦後の公教育から完全に抹殺されました。「七度生れて朝敵を滅ぼさん」という生き方を消し去ることが古い日本からの脱却のように、学校も世間も無視し続けました。

その楠木正成は生徒たちに何の抵抗もなく受け止められました。赤坂城・千早城の戦いは正成の正義と智謀と理解され、建武の新政から湊川の悲劇も使命感の発露と納得したようです。毎回締め括りは「偉人の言葉」で、今回は「七生報国（しちしょうほうこく）」を示し、何度でも日本に生まれ変わって毎回国のため・皆の幸せのために尽くしたいと念じた人として記憶に留めてくれそうです。

志明館校歌に登場する吉田松陰が、後世正成の墓前を通る度に跪き頭を垂れて身内のように慕ったことも、正成に親しみを覚える一助となったようです。

こんな授業が全国で始まる時、日本再生をみんなが実感するでしょう。

偉人伝授業の資料（AI作成）